

盲先覚者伝記シリーズ

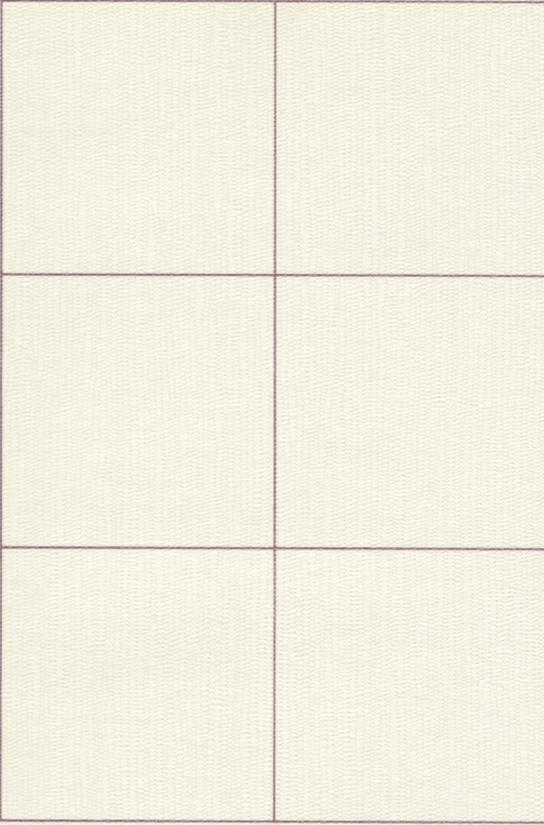
5

TORII TOKUZIRO

鳥居篤治郎

世界に眼を・永遠の青年

赤坂 一



盲先覚者伝記シリーズ

5

TORII TOKUZIRO

鳥居篤治郎

世界に眼を・永遠の青年

赤阪 一

推薦のことば

日本盲人福祉委員会理事長 実本博次

国連が、1981年を国際障害者年に制定したことにみられるように、近年、社会の障害者観は大きく変貌しつつあります。特に、文化が深く根をおろした所では、かつてのように、障害者を憐憫の情のみで救済の対象とする風潮は消滅した、といっても過言ではありません。こうした国際的な障害者観の大きな流れの中で、わが国でも障害者の生活は、日一日と社会に統合され、生きがいのある自立したものになりつつあります。

しかし、一時代前に目を転じたとき、今でも民度の低い地域がそうであるように、障害者に対する物心両面からの抑圧は想像に絶するものがありました。視覚障害者だけに限っても、先人が残した心のひずみの記録は、いくらかでも数え上げることができます。同じ障害を持ち、悩みを分かちあえる者が、自ら先頭に立って、いばらの道を切り開いていかない限り、同じ運命に悩み、苦しむ者に光を当てることができない時代であったと言えます。

わが国でも、そのように自らの障害を克服した先覚者は、多数輩出しています。視覚障害者の世界でも、古くは塙保己一、杉山和一といった偉人から、現代の盲人文化や盲教育の基礎を築いた先達まで、数え上げれば枚挙にいとまがありません。

しかし、残念なことに、ごく卓越した人物を除いて、その人の偉業と人となりを伝えるものはあまり残されていません。半ば伝説化した中で、その人の業績が風化しつつあるというのが実状のようです。特に、現代の視覚障害者の生活に直結するような業績を残した近代の先覚者に、その感が深いと言われます。じかに訾咳に接した方々の証言を、今集めておかなければ、やがて忘却のかなたに押し流され、先達の偉業を正しく後世に伝えられなくなる、そんな状況にあるように思われます。

こうした折に、日本盲人福祉研究会が、この伝記シリーズを企画し、刊行することは誠に時宜に適し、大いに意義のあることと思います。こうした地道な仕事を続けておられる同会に対し、深甚なる敬意を表するとともに、視覚障害者の方には、先輩の不屈の闘志とそのさわやかな人生を知っていただくために、また、視覚障害者の諸問題の解決に当たっておられる方には、指針を得るための座右の書として、本書を推薦する次第です。

本書の刊行にあたって

日本点字図書館理事長 本間 一夫

われらが先輩鳥居篤治郎は、豊かな天分と優れた才能を持つと同時に、盲人の幸せを思う熱意の人でもあった。したがって、その社会的活動は、きわめて広範なものだったが、つきつめてゆけば、やはり偉大な教育者であったと言えるだろう。

静岡県の江尻、三重県の津、京都と教壇に立つこと40年、多くの教え子を世に送り出している。教え子が、その恩師に対して尊敬と感謝の思いを抱くということは、無論珍しくはなく、むしろ当然のことであろう。しかし鳥居の場合、それが特別だったのである。その師弟の間に流れ、通い合う情愛の濃さ、美しさは、計り知れないものであった。教え子だけではない。いわゆる先輩、後輩の間にも深い暖かな人間関係が生まれ、成長していったのである。言い換えれば、鳥居ほど多くの教え子や後輩から慈父のごとく親われ、頼られていた人物は他になかったと私は思う。

教育者としてばかりではない。日本盲人会連合の2代目会長として、全国的にその識見をふるった。また、資産を投じての京都ライトハウスの創設を初め、京都盲人協会、日本点字研究会、盲人エスペラント協会の創立など、わが盲界に残した社会的文化的業績は数え切れないほどである。

さらに個人的に見てゆくならば、エスペラント語、英語の語学力は、その目を常に世界に向けさせていたし、詩歌、随筆、論説などの筆力は、何冊かの著書となっているし、専門の三療医学の学識の深さは、誰もが知るところである。そして、そのすべての根底にあるものは、友愛と平和を基調とするバハイ教の堅い信仰にあったことを見逃してはならないであろう。

さらに忘れてならないのは、文字通り一心同体、2度の海外旅行の時を除いてはいつも付添っておられた奥様の献身である。3人のお子さんを早く亡くされたことが、お二人の愛情を一層深めたと言っては言いすぎであろうか。

その奥様は、なお京都で御健在である。

私が初めて鳥居御夫妻に出会ったのは、関西学院に入学した年、昭和11年の夏のことで、場所は神戸の富士ホテルのロビーであった。バハイ教の伝道師、アレキサンダー夫人が一緒だったと記憶する。その初対面の時から、私はお二人に強く引きつけられてしまった。「困難を不可能で考えてはいけない。不自由と不幸とは別だ」などと語って私を激励されたのであった。その翌年、京都盲学校で開かれた、今で言う盲人用具展示会を見に行くために私は授業を休んだが、函館盲啞院から関西学院と前後10年の学生生活を通じて、私が授業を休んだのはこの日1日だけだった。これも鳥居の魅力だったのかも知れない。

後に私が東京に出てからは、京都にお住まいの関係から、厚生省などの会合に何度か代理出席を命ぜられたこともあった。私は今、昭和15年の11月、日点の発足と同時に発行した「図書館ニュース創刊号」という点字の小冊子を宝物のように大切にしている。これも、「自分が持っていて意味は薄いですが、君には大事な物だろう」との手紙と共に鳥居から送られたものである。

このたび、同じ京都盲学校の副校長として鳥居をよく助け、鳥居家をもっとも良く知る赤阪一氏に、この伝記の執筆をお願いできたことは、誠に喜びに堪えないところである。

最後になったが、5年前企画した、この「盲人先覚者伝記シリーズ」の発行は、この5冊めで完了する。この5冊はすべてテレビ朝日福祉文化事業団の御援助によるものであったことを記して、心からの感謝を捧げるものである。

目 次

はじめに	1
第一章 孟 春	
1. 出自・幼年期	
— 父親の教育・厳しくあたたかい躰	3
(1) ノビノビやんちゃ坊主	3
(2) 三河内の鳥居武右衛門	3
2. 少年期・東京時代	
— パッションネートな文学少年	7
第二章 青 春	
— 環境と人に恵まれた青春充電の日々・東京時代	
1. 盲詩人エロシェンコと	
バハイのアレキサンダー女史との邂逅	10
(1) エロシェンコ、エスペラントとの出会い	13
(2) アグネス・アレキサンダーとの出会い	16
2. エスペラントについて	17
(1) 日本の盲人とエスペラント	17
(2) エスペラントによる国際交流	18
3. バハイ教について	19
4. 中村屋のサロンと相馬愛蔵・黒光夫妻	24
5. 出会い	
— 「私の財産は友だち」(鳥居のことば)	27
第三章 朱 夏	
— 社会人— 教育者・愛盲の人として羽搏く	
1. 「盲目宣言」— 三重盲教員時代	29

2. 京盲時代	
— 教育者として大きく羽搏く	33
(1) 理療科教員・副校長	33
(2) 「世界に眼を」— 渡欧日記「垣のぞ記」	35

第四章 白 秋

盲人福祉— 愛盲の人として内外に羽搏く

1. 愛盲の花馥郁としかおる	
— ヘレン歓迎の辞	37
2. 京都ライトハウス成る	39
3. 大愛の師鳥居嘉三郎先生	42
4. 仏教とのかかわり	
— 「慈眼視衆生」	45
(1) 仏眼協会・弘誓社	
— 山本暁得と仏教図書出版に協力	46
(2) 慈眼協会	
— 友松円諦師の慈眼愛盲運動に協力	48
(3) 壺 阪 寺	
— 香りの花いっぱい運動に協力	50
5. 救癩活動	
— 「癩盲」と舌読	51

第五章 玄 冬

— 盲人は独立すべし、されど孤立すべからず

(鳥居のことば)

1. 無冠「文筆の人」に	
— 「すてびやく」執筆	53
(1) 父の日記と思い出	56
(2) 鐘の音	57

は じ め に

ひとりの人物が生まれ、育ち、生きて来た時代的諸背景の中でその人物の生涯を考えてみる。そこにこそ動きのある、つまり生きた人間像がとらえられるからであろう。哀歎をこめた人間の生涯、その時代をしたたかに生きぬいた人の生きた歴史、軌跡を、人生を生きる姿勢、生きぬいた根性を、ふり返りみる伝記ものが近来とみに出版されている。それはこの様な疾風怒濤の時期、わけても物の豊かでなべてリッチな、その反対に“こころの貧しさ”を謳われる時代なればこそと肯かされることである。

障害をのり超えて大きな足跡をのこした島居篤治郎先生が亡くなられて今年はまだ17年となる。偉大なる先覚、達眼の人としての讃辞にどうかするといたずらに美化し、さては雲上の人とヒーロー視する向きがあるのは文字通り「遺憾」である。「偉大なる凡人」（岩橋英行氏談）であった人間性豊かな先生の人柄、「真剣に苦しみ、真実に生き、運命を愛し、運命を生かした」ひろい大きな世界にいつも目をむけていた達眼のヒトとしての島居篤治郎をなんとか浮彫りしたいという存念でここに敢て秃筆を揮うこととなったのである。

ヘレン・ケラー女史が岩橋武夫氏により日本に紹介され、当時大学を出て京盲の教師となった筆者は彼女の全集（昭和11年）をひもとき、また翌昭和12年の来日でヘレンを絶讃する声の中で、天邪鬼にも筆者はヘレンの今日あるその陰の指導者、天性の愛の教育者サリヴァン女史とのめぐり会いを忘れてはならぬと教育のすばらしさを主張したものである。さればこそ島居を生んだ多くの人との出会い、幼時のきびしくも温かい父君の教え、少年期、青年期でのよき隣人との邂逅——殊に異邦の人、盲詩人エロシェンコ、後年の島居先生の深いバハイの信仰を賦与したアレキサンダー女史、さては新宿中村屋にサロンをなした黎明日本の新頭脳集団との交流影響、特にエロシェン

コヤアレキサンダー女史を介しての秋田雨雀氏らとのつながりなど、その人間形成の大いなる土壌に鋤を入れ、「人間鳥居」を、との想念に駆られて筆を執った。が、思うに任せぬ物心とりどりの世俗雑事にかまけて遅々として運ばぬ筆の動きに心ならずも予定の時間をオーバーし、やっとここに筆を擱くに到った。顧みて漸愧に堪えぬ次第である。

人間を何よりもこよなく愛されたひたぶるの妙巧達眼の先生は、ゆくりなくもその生涯を閉じんとされる病冗進の折、透澄の心境を

風吹けば千尋^{ちひろ}の底の大海の

神秘を語る貝の風鈴

とうたわれている。深く大きな先生の慈愛のみこころがにじみ出て居り、思わず襟を正す思いで、先生のお人柄そのものがしのばれる。少年の頃から詩歌に深くこころを寄せて居られた先生の風韻がしみじみと思われる。

重ねて言う。「世界に眼を」と常に特に若い盲人に呼びかけられ、「前進せよ、いつも夢見よ」といつもロマンを追う永遠の青年であった鳥居の人間性を浮彫りにしてみたい強い想念に駆られて筆をすすめたつもりである。

第一章 孟 春

1. 出自・幼少期

—— 父親の教育・厳しくもあたたかい躰

(1) ノビノビやんちゃ坊主

利かぬ気のやんちゃ坊主、乳母泣かせのいたずらっ子。目は見えなくとも、ちっとも村の腕白どもと変わらず、竹馬に乗って川の中へ入って遊んだり、屋根へ登って雀の巣をとるなどと篤治郎坊ちゃんはとても村で一、二の旧家の「エエ衆しのぼん」とはおもえぬやんちゃ坊主。普通の子（健常の子）とちっとも変らぬ子どもの遊び、いたずらごっこをさせ、魚釣りにも、お祭りにも、役場の用事にも連れてゆくといったお父さんの教育・しつけの徹底が、さらでだに視覚障害を持つ子どもにコンプレックスを持たさず、一人前の子どもとして人前でも扱ってくれたという家庭の教育方針に、ノビノビとすくと篤治郎は一かどの根性を持った坊やとして幼児期を楽しく暮らしたという。後年鳥居は「これが私の一生にどれだけプラスになったか」ときびしい過保護ならぬ何でもやらせる、なんでも経験させ実践により学ぶという父親のすばらしい教育に感謝を捧げて居られる。（すてびやく）

(2) 三河内の鳥居武右衛門

先生の郷里は、京都は宮津の手前、俗に丹後といわれる与謝郡みごうち三河内村（昭和30年に近傍4村が合併して現在は野田川町）で、加悦かやだに谷盆地の東部にあり、主要産業として丹後ちりめんと呼ばれる高級織物（紋意匠ちりめん、袋帯、つづれ織）を製造する丹後きっての機業の中心地である。鳥居先生の

生家も伊都夫人の生家後藤家も名だたる旧家名門で、あるじは村長や府会議員など輩出した大きな織屋さん。篤治郎も世が世なら鳥居家の御曹子、長じて武右衛門の名を襲名、織物を作る地方の名士となる宿命。

父武右衛門、母やをの次男として明治27年に生れ、3歳熱病から失明、のち一時回復するも4歳再び視力を失い、6歳ごろ全く失明ということになった。その間の御両親殊に父上の御心労、当時まだ不便であった丹後から京都東京と名医をもとめての旅、さては神仏に縋り柳谷の観音さんに願かけの参詣など手をつくされた苦辛の日記を父君亡くなられた後に知って、この父の大愛に「それは余にも深過ぎて語るべき言葉が見出せない。ただただ感謝の念が胸にこみ上げてくるばかりである」(すてびやく)と語って居られる。

明治30年2月、熱病から眼球が白色の混濁物に掩われ視力が無くなり、医師は京都の病院行をすすめた。汽車とて無かった当時、僅か丹後から30余里の道のりも駕や途中川舟等3日かかりで、乳母と二人の駕の中に炬燵を入れ、父や祖母、見送人等一行12人の旅立ちに、村の子どもが「やお嫁入りだ」とはやすのが悲しいやら癪にさわるやらと祖母の懐古談が伝えられている。そんなことでこのあと少し視力が回復(明治31年4歳)するが、上京して東京の医師の診断を受けた翌明治32年、回復の見込み無しと言われやがて失明となったのであった。

ところで、この後普通なら真綿で包むように大事に大切に、過保護になっても不思議でないのが世間通常、名望家のこととて家に障害児のある事を隠したり、世間体を恥じるなどという事があっても、少しも不思議でもない当時である。(筆者も随分長く盲学校に勤務したが、昭和の30年40年になってもこの傾向はちっとも変わらず、所在を知って入学勸奨に出かけたことは枚挙にいとまがない。後年養護学校長になったときも同様であったので特にここに銘記したのである。)

然るに、この鳥居先生のお父さんは実にすばらしい新しい進歩的な先導的な考えをお持ちだった方で、現在言うところのノーマライゼーションをしっかと根に持って居られ、人間皆同じ、障害児を持って何を恥じることがあろうかと、世間体を気にするどころか、機会あるごとに積極的に篤治郎を人中

に連れてゆき他の子どもと同じ、いや同じどころかできるだけ色々な場所、出来事に実際に触れさせ、見聞させ、いやしくも閉鎖的な過保護などはさらさらしなかったという、その頃としては誠に珍しい程すぐれた教育に徹して居られたのであった。たとえば神社へお参りすると、狛犬さんに触らせ、鳥居を撫でて社前で鈴を鳴らさせお賽銭を箱に投げ入れさせ、内陣の扉の彫刻を触察観查させるといふ、さながら盲学校低学年の熱心な先生顔負けの徹底ぶりだったという。かくて頑是なき、利かん気のやんちゃ坊主と篤治郎少年は成長するのであるが、時に羽目をはずしてやんちゃが度を越すそのいたづらを咎められて文句を言ったり、言う事をきかぬとき、父はきびしく叱って「さあこれを持ってどこへなりと出て行け。お前のような奴は、お乞食^{こじき}さんにもなれ」と入口にいつもかけさげてある頭陀袋^{ずだぶくろ}を持たされたそうである。この頭陀袋の中には塗りの剥げた椀と箸が入っていたそうである。一度も家を出て行った記憶が無いところから、やっぱり本心は気の弱い子だったのだと思う、と先生は語っていられる。目が見えなくともお乞食さんにだけはなるまいとの負けじ魂が今もあの幼児期の体験から巣食って、父親のきびしい然し実際に即しびしとさびの利いたしつけ、その底にあるあたたかい父の愛情をしみじみなつかしがつて語られた先生のお顔を筆者は今まざまと蘇らせている。

後年の先生の間人形成の揺籃期のしかとしたひと幕を見る想いがする。

父上は、村芝居、お祭り、京都では博物館、相撲、手品となんでも見せてやり、あらゆる機会にもものを「見る」ことを篤治郎少年に教えて居られる。実際にその場へ行って経験することこそ大事と、体験の尊さを味わせて居られたのである。デューイ流の、ラーニング・バイ・ドゥイングを地で行って居られるすばらしい教育者であり、京は丹後の織屋のおじさんに過ぎない方だが、人を見、時代を先取りした進歩的な人であった事が知らされる。むべなるかな、このお父さんは後年京都府議会議員になっておられる。京都府議会と言えば忘れられぬのは、初代の府議会議長として、全盲にして下肢障害、人におんぶされて議長席に登壇されたあの山本覚馬先生を第1回選挙に選出した京の町衆のすばらしさ。従って初期の頃の府議会議員にはそれこそ後年



鳥居篤治郎先生

各方面に大活躍した優れた方々が続々輩出しているのである。(山本覚馬は後、京都商工会議所会頭にもなっている。春秋の筆法をもってすれば勝海舟との親交などからしても彼が障害それも重複障害者で無かったら、恐らく黎明期日本の中央政界に隠然たる勢力地歩を占めたであろうと思う)

鳥居のあの大らかで一面暢達余裕を持って処せられたゆとりの人生哲学は、多分にバハイの信仰、エスペラントの国際性世界的視野に立つ気概が注入されたとは思いますが、幼年期の父君による家庭教育の影響するところ極めて大なるものがあると筆者は強く主張するものである。「やるだけのことをやればアトはなんとかなるよ」とか、「何でもやればでけんということはない。やればできるもんだ」。この根性はまさにお父さんの植付けられた「頭陀袋」精神論の所産と断ずるのは筆者の偏見か。あくまで障害者扱いをされずにと配慮した父上にただただ頭の下がるおもいがする。

2. 少年期・京盲時代

—— パッションネートな文学少年

幼児期の家庭における主として父親による自立自主の強いアクセントのある躰教育は、やがて笈を負うて京都市立盲啞院に入学すべく叔父後藤宅に寄偶するに到って、近くに住む従兄にあたる蒲田丈夫少年（1歳年上にあたる）と邂逅し、その友情に育まれて文学的素養の啓培、根性の育成、語学を学ぶ素地の外国文学翻訳ものへの傾注の為の根気などに形を変えて実現してゆくのである。肝胆相照らすこの従兄との文学少年ぶりは、「読書アニマル」と自称したごとく飽くなき貪欲なまでの読書欲アペタイトの噴出するまま濫読耽読、和漢洋に亘る文芸、哲学、思想、詩歌と手当たり次第に夜を徹して読書にあたり、後藤の叔母によく「寝なさいよ」と注意された。しかも単なる読みっ放しでなく、読後のディスカッション、批評読後感合評等欠かさずに力を入れ、これが後年広い視野識見を持つ先生の人間性形成への基盤になったことは確かであろう。

若き日の情感に多彩な振幅をかもし出す貴重な培土となり、詩人的豊饒の流麗なる詞藻を育てた素地は、この少年期の万卷の書籍の涉獵多読が大いなる功頭を成しているのである。

パッションネートな友情はついに結集して二人の合作著書「吐息^{といき}」という自家製本としてつくり出された。随筆、散文、短歌を所載150頁の文集で、表紙、装幀、カット、挿絵などはすべて蒲田君の手による手書き。鳥居は別に点字写本を作製した。幼児期つちかわれた彼の自主性積極性は、少年となり西洋文学を翻訳もので読み耽っているうちに原語で読むことによるこび、それに今後の日本は世界に目を向けるべきだと強い考えに思ひ到り、英語の勉強をはじめ出した。もとより親友蒲田君に次々買い求めてくる英語の本をリーディングサービスしてもらい、蒲田君は些か閉口ぎみ。やがて彼は三条のYMCAに通って英語の勉強を本格的にやり出すのである。彼の積極性は、たとえば歩行にしても、白いステッキをまるで正眼者の元気な壮年者が振り

まわしてあるくような様子でフリ廻して乱暴なほどズンズン歩く。蒲田君は「危ない倒れるぞ」としばしば悲鳴をあげて静止したほど、盲人とは思えぬ歩きぶりだったと言われる。年少気鋭の鳥居少年の姿に、後年有名な三重盲での「盲目宣言」をやった鳥居青年の姿がオーバーラップされるおもしろいにはほえましくなる。

「世界に目を」。それには語学の学習しかない。これがのちの語学の天才、世界に名を成す萌芽をここに見るのである。

少年期の友情が、彼の人間形成の揺籃となったことはたしかであろう。よき人とのめぐり会いというものが如何に大きな好影響をあたえるかのよき証左ではある。

京都盲啞院に入った彼は意欲的に勉強に力を入れ、歌人重久梓男氏より和歌の指導を受け、高等科に入っては中村望齋先生から国語文法を特別に学んだ。鳥居先生が歌を早くから勉強されて殊に文法を学び歴史的仮名遣いを学んで居られるので、点字使用の全盲の身で「恋ひすてふ」や「しでふごでふ（四条五条）の橋の上」などの古歌や古典にも深い理解や造詣をお持ちで、漢字の偏やツクリなどをたずねられて、驚いた筆者は、ことばや文字に対する飽くなき探求力や知識の深さなどにただ感心したもの。先生がエスペラントをはじめ英、独、仏語と読み書き話される語学力のすばらしさもこの頃からの熱心真摯な努力学習の賜物であることがわかる。YMCAで勉強された



蒲田氏よりリーディングを受ける

英語は、のちに鳥居先生のキングイングリッシュの見事さ、発音の美しさが京都の英語の先生方に賞讃されていた事で、その勉強のあとが偲ばれる事である。

近代日本の黎明期、京都が新しい時代の文化の開発に異常なまでの情熱を燃やし革新的な軌跡を各方面に残したことはあまねく周知のことであるが、わけても文教興隆が新時代の先導的試行としてまずは「人づくり」と教育の開発を全国に先駆け、未だ文部省において「学制」（明治5年）が發布される前、明治2年、早くも京都市に義務教育としての小学校を市内に64校、町衆の連帯意識の燃焼により自分たちの学区、その文教の中心的存在として1学区1小学校を見事に設置した京都である。その京都は、「廢人教育あるべし」との一語を掲げるのみで「学制」發布後もなかなか障害児教育にまで手が及ばなかった政府の文部行政まだるこしとばかりに、聾啞児の所在にこれも町衆の庶民の盛上る声「この子らを放置しておいて何の文明開化ぞや、この子らにも教育を」とヒューマンイズムの強い隣人愛よりする声にこたえて、京都盲啞院の開創となる。かかる革新的土壌を育てたる京都の地にして当時良二千石榎村正直知事の顧問として府行政の指導的役割をしたのが、実に山本覚馬という下肢障害で全盲の障害者。この素晴らしい人物のもと、潑刺として教育だけをとっていても小、中、女学校から同志社大学の設立など活発な文教の都京都は未来を夢見る若人の理想の環境となっていた大正初期、日本最初の盲学校（障害児教育の元祖・宗家）としての京盲に、夢多きこの多感建設的精神に憧れた鳥居少年が、どんなにかアムビシアスな気持ちに憧れて学んだことであろうかは想像に難くないところである。

郷里に、細やかにあたたかい、きびしいが優しい父母があり、母と共に点字を覚えてくれた弟もあり、京の後藤の叔父さん夫婦や仲のよい蒲田君の存在と、鳥居少年をめぐる環境や人とのめぐり会いを考えればしあわせ一杯の鳥居少年だった。学校の先生や友だちと楽しく充実した京都の恵まれた学校生活の中で篤治郎の毎日毎日心足ろう寧らぎの連続であったことだろう。（因みにこの蒲田君は後に朝日新聞台湾支局長となり、定年後は熱海の信用金庫理事長の要職に就いた。既に今は亡し。伊都子夫人談）

第二章 青春

環境と人に恵まれた青春充電の日々

1. 盲詩人エロシェンコと

バハイのアレキサンダー女史との邂逅

少年期、彼は従兄の蒲田丈夫君との交遊の中で文学を解し、もののあわれを深く理解し、読書の中から古今東西の哲人先覚に深く傾倒し、学問への強烈な傾倒のよろこびを知って、京盲時代を楽しく送った。1912年（明治44年）17歳の時、彼を英国へ留学させようという話が持ちあがった。好本督先生が英国から帰国され京盲を訪ねられた折、いい学生がいれば一人英国へ寄越して貰えば一切を引受けて教育したいとの話が鳥居嘉三郎院長にあり、当時普通科主任の中村先生が即座に、それは鳥居篤治郎が最適と推薦された。健康で成績は優れており家庭も良いと院長も同感、早速本人を呼んで意向を訊くと「行きたい」と言う。

父君、叔父さんも喜ばれたが、盲目の少年をたった一人英国へ出すのにためらいもあったのは無理からぬこと。それと帰国後の進路の心配などもあり、たまたま親しくしている先輩の小林卯三郎さんに意見を聞かれた。小林氏は「英語の力もそうだが、将来職業として教員の道を考え、東京盲学校の師範科で勉強して資格を獲得後、語学力も心配ない様になってから行った方がよいのではないか」との事で見送りになったという事がある。

篤治郎少年はこんないきさつもあり英語の学習はもとより一層の勉強に励み、やがて盲学校の技芸科（三療）、普通科を卒業して、いよいよ一層の学問究理の希望に燃えて上京、国立東京盲学校へ進学。東京での輝かしい青春の視野拡大、世界観の拡充の充実した青年のアンビシャスな生活を始める事

になった。

時に1914年（大正3年）20歳の春である。東京牛込に住して雑司ヶ谷なる東京盲学校師範科鍼灸科に通学することとなった。

翌大正4年、その邂逅が鳥居の生涯に大きな影響を与えた亡命白系ロシアの盲詩人でエスペランチスト、ワシリイ・エロシェンコとの記念すべき出会いがある。そしてこの詩人でエスペランチストを介して、秋田雨雀や神近市子、竹久夢二などといった人たちとの交流が始まるのである。鳥居青年が牛込北町の下宿（御主人も盲人）から雑司ヶ谷の東京盲学校に通学していた頃、お葉さんに失恋して放浪中の竹久夢二が、秋田雨雀さんが仲に入って鳥居の下宿に転がりこみ、ある時期（何カ月か）同宿した事がある。この事は長い間伊都子夫人に話をせず、いつ頃からずっと後に夫人に語った。女道楽の夢二と一緒にというのをはばかってのことらしいとのこと。夢二と共作した俚謡がある由（伊都夫人談）。そして新宿にあるインテリ夫妻相馬愛蔵・黒光氏の経営する中村屋をサロンとする当時の日本の前衛先進的な頭脳集団、江口渙、片上伸、長谷川如是閑、堺利彦、大杉栄、黒板勝美、丘浅治郎等々まさ



東京にて奥さんとともに

に錚々たるグループの中で、揉まれ触発されシンクタンクを充填していくのである。

秋田雨雀日記には、這般の事柄を伝える文言を随所に散見するのである。たとえば、

1915（大正4）10. 20

今日はオーガー博士夫人とアレキサンダー女史がきた。エロシェンコ、児玉、高畑の諸君演説。

1915. 12. 17

エロシェンコ君来訪。エロ君は日本の短歌を批評した。

1916. 2. 5

きょう盲人のエスペラント会があったそうだ。エロシェンコ、浅井、平方、鳥居、小坂、児玉らのエスペランチスト来訪。平方という人は東京盲学校の卒業生で、同愛盲学校校長代理のようなものをしている人である。盲人であるが、頭脳のはっきりした人らしい。

1916. 4. 22

神田の宝亭へゆく。……鳥村抱月、馬場孤蝶、森田草平、小山内薫がきていた。夜早稲田の沙翁記念を見た。坪内士行君が「シーザー」をマネージした。12時からエロシェンコ君、竹久君（夢二）らとニコライの復活祭を見た。

この日記第1巻の1917（大正5）年9月29日のところに次の記事を見つける。

毎日雨ばかり降っている。入浴。

バハイ協会訪問。午後2時から矢来3番地42号の盲詩人鳥居篤治郎君のバハイセンターを訪う。オーガー博士がこられた。鳥居夫人、バハイの少女、平方、田中君もいた。

1917（大正6）11. 9

学習院の官舎に鈴木大拙氏を訪う。（略）夜、バハイ協会に鳥居君を訪

う。明後日のバハイの会にはミス・ハーンも、オーガー博士夫妻もくるということであった。

1917. 11. 22

エスペラント大会。鳥居君の歌。大盛会。

1918（大正7）5. 5

夜バハイの鳥居氏を訪問した。

1919（大正8）6. 6

夏らしい暑さ。33度ぐらい。午後2時からバハイセンターの鳥居篤治郎君のところへゆく。

以上のほんの一部の雨雀日記から鳥居青年のエスペラントやバハイの活動、雨雀氏や外人の方々との交流の様子が窺える。単に盲学校でハリ灸や東洋医学の勉強以外に、広く大きく羽搏いている生々した精神生活の内容ある日々が知られよう。

(1) エロシェンコ、エスペラントとの出会い

後年鳥居が若い盲人たちをいつも励ますことばは「井中の蛙にて終るな。世界的視野を持って」である。国際的視野、巨視的世界観をつねに持つこと、眼を世界に向けよと、変らぬ若いころの「永遠の青年」（エロシェンコがトリイさんにつけた呼び名）そのまま眼なき人々に言われたことばであるが、これはまさに青春まっさかりの鳥居青年に大きい影響をあたえたエロシェンコ（エスペランチストでもあったバハイのアレキサンダー女史とともに）との出会いが強烈に浸透しているのである。世界は一つ、人間皆はらからというバハイ教からの影響については後述するとして、エロシェンコというとすぐ浮かぶのは中村^{つね}彝画伯の有名なエロシェンコの肖像画（東京国立近代美術館蔵）のこと。これは日本の近代美術史上に光彩を放つ肖像画としても傑作と言われ、中村彝はこの作を描いて帝展の審査員となった位である。江口渙氏が中村屋の2階にかかっていると書かれて、筆者も若いとき新宿へ出かけたことがあるが、かかっていると2階で描かれたというのとのまちがいで、



エロシェンコとアレキサンダー

エロシェンコが中村屋の相馬夫妻（有名な愛蔵・黒光夫妻）に大事にされ、お世話をうけ寄宿していたことからの混同なのであろう。当時の青年学生の間には圧倒的に流行していたルバシカ姿が、さすが本場のロシア人であっただけでなく、すごく似合ったエロシェンコの瞑想的な静中動そのものの様な彼の姿は観る者に感銘を与える。

中村はこの絵を描きおえて翌日から倒れ、何日か安静状態をつづけなければならぬ状態になったと言われて居り、それほどの興奮と感動によって描かれたということが判るだろう。（これは鶴田吾郎氏から江口渙氏への書信のことばを引用。）

「清麗でどことなく超世界的なはてしない情感がにじみ出ている、前に立つ者にはほのぼのとした愛着を抱かせずにはおかない画で、その繊細なタッチにはフランスが生んだ巨匠ルノアールを思わせるものがある、といわれている。日本の肖像画中の傑作として著名なのは知る人ぞ知るところ。」（世界盲人百科事典、盲人の生活——絵画、筆者解説）

エロシェンコ全集3（高杉一郎編 みすず書房）の掲載写真にある東京盲学校特別研究生時代のものや、ルバシカ姿で相馬黒光さんのピアノを伴奏にバイオリンを弾く姿や、蛇形の杖を持つ端正な彼の長髪の青春そのものの様な姿はよく彼を知るに役立つが、前述の肖像画は実に髣髴として彼の全容を知り窺えるものといえよう。

かれワシリイ・エロシェンコは4歳のときハシカで盲目となり盲学校に9歳で入学（1898年）、16歳のときエスペラントを学んだ。1908（明治41）年モスクワの盲学校卒業後、1909年万国エスペラント協会のツテを頼りにロンドンの王立盲人音楽師範学校に留学した。彼がバイオリンやいろんな楽器を上手に演奏できるのはこの経歴有ってのことと知る。モスクワに戻った彼が

1912（大正元）年日本総領事館の紹介で日本語を学び、やがて1914（大正3）年25歳の時万国エスペラント協会（UEA）を通じて日本へ来る事になり東京へ。東京盲学校の特別研究生となったのである。この詩人で音楽をやりエスペラントをといわば七面八臂の若き颯爽たる異邦人、しかも障害をものともせぬたくましくまでバイタリティのあるこの盲青年は、かくして秋田雨雀や竹久夢二、相馬愛蔵、黒光夫妻によって経営されていた新宿中村屋をサロンとして寄り集う当時の日本のフロント、頭脳集団ともいべき人たちのサークルにたちまち人気者として迎えられ、「早稲田文学」に詩や童話等を寄稿する活動を通じ、若い人たちに融けこみ、エスペラントを通じていよいよ幅をひろげるに到るのである。東京盲学校に在学していた鳥居青年は、たちまちエスペラントを学ぶ盲人のリーダー的役割をする様になり、彼との交遊は日まじに濃くなってゆくのであった。

彼が1917～1918年ビルマやインドの盲学校の教師となった期間があり、東京に戻って早稲田大学の聴講生となった1920（大正9）年、長谷川如是閑や中村彝らと交流。のちに手紙の中で「坊ちゃん」と鳥居を呼び「永遠の青年」と言ったエロシェンコとの交流は、鳥居青年をして、ひととき「早大に入って詩人となろう」とさえ考えさせた程、エロシェンコへの傾倒が強かった鳥居であった。

そもそも、エスペラントという世界語（共通語）に強い魅力でもってひかれたのは、点字が盲人の社会の世界語であったところから入りやすく親近の感を持たれたのであろう事は首肯される。このエロシェンコの精神を形成する決定的な役割をはたしていたのは、ザメンホフのエスペラント、その内在思想といわれている「人類一家主義——ホマラエスモ」である。全人類は一つの家族として結ばなければならぬというのがそれである。

日本で最初のエスペランティストといわれるのは丘浅次郎であり、彼がドイツに留学中1891（明治24）年の事。長谷川二葉亭が学んだのはウラジオストックで11年あとの1902年であり、さらに4年後の1906（明治39）年になって、東京に黒板勝美、堺利彦、大杉栄や丘浅次郎などにより日本エスペラント協会が成立するのである。エロシェンコは、秋田雨雀を通じての日本のエ

スペランチストや盲学校の盲人たちだけとの限られた交友から、やがて広く日本の文学者や社会主義者たちとの結びつきが強まり、彼とそのエスペラントを知るに及び、生きる勇気を与えられ、ともするとそれまで陥っていた深い絶望を克服することができたと喜んだものである。(秋田雨雀日記1915(大正4)年)

鳥居は、のちに盲人のために点字のエスペラントの辞書をつくるなどのエスペラント語へかける情熱が、やがて彼の「ひろく目を世界へ」「若者は世界へ出よ」となり、その媒体としてこの世界語の習得をつよく呼びかけるのであった。物の見方、世界観が巨視的にひろく大きくなるエスペラントの効用は、彼にとって極めて大きい力となっていることを忘れてならない。

ついでアレキサンダー女史が、エロシェンコにおくれること凡そ8カ月、大正3(1914)年の終り、来日するのであるが、女史によりバハイ教を知るに及び、大きな影響を持つに到るので、そのことにつきに言及してゆきたい。

(2) アグネス・アレキサンダーとの出会い

鳥居夫妻と長く後々まで深い交流に結ばれたこの女史は、鳥居が三重の盲学校から、強い要請で京都の母校の府立盲学校の教師になって京都に住むとあとを追って、ついに最後まで住居を鳥居夫妻に近い京都大徳寺や船岡山の近くに住むほどであり、まるで前世よりの強い太い絆、えにしの糸に結ばれるようなおつきあいをするに到ったのである。彼女は、アメリカの学者でハワイ・ホノルルのオアフ大学学長ウィリアム・アレキサンダー教授の娘として生れ、1900年ローマにいたときバハイ教の信仰に入った。それ以後バハイ教の布教のため一生を(独身で)ささげる生活に入る。日本にやってきた彼女はいつも真白な着物に紫の帯を締めていた清楚なお嬢さんであったという。

このバハイ教の日本に於ける最初の伝道師として来日するアレキサンダー女史を鳥居が知るの、エスペラントのエロシェンコを介してであった。どうしてエロシェンコがこの女史と結びつくに到ったのかには、次の様な事情があったのである。アグネスがジュネヴァで知り合ったロシア婦人のエスペランチストから、日本に行ったら盲人でロシアのエスペランチストを探して

くれと頼まれたことがあったからなのである。1915（大正4）年アレキサンダー、秋田雨雀、神近市子、福田邦太郎などと交友する。片上伸とともに北海道旅行。相馬黒光と知り合うと、秋田雨雀はその日記にエロシェンコと女史との交遊が始まったと記している。

ここでどうしても鳥居篤治郎の人生観、世界観を、すなわち彼の人格を形成する大きな柱というかバックボーンとなったエスペラントとバハイ教とについてその概要をしるして置く必要があると思われるので、極めてアウトラインであるが以下述べてみたい。

エスペラントについては鳥居の「世界盲人百科辞典」の中「盲人の生活」での記述から、バハイについては「エロシェンコ全集3」中「エロシェンコの生涯・12バハイ教」の高杉一郎氏の解説から借用した。因みにバハイはエスペラントを国際協力のベルトとして採用している。エロシェンコとアレキサンダー、そして鳥居とのつながりがかくしてできたのである。

2. エスペラントについて

(1) 日本の盲人とエスペラント

日本の盲人とエスペラントとの出会いは、1914（大正3）年に来日し、東京盲学校研究科特別生になったロシアの盲詩人ワシリイ・エロシェンコ（1887-1952）が、その翌年に学生有志に講習を行なったことに始まる。その受講生の一人に鳥居篤治郎がいた。エロシェンコは、同年7月にシヤムに向って日本を去ったが、1919年再び来日し、大阪、京都で講演するとともに、関西における盲人の間にもエスペラントを移植した。ほどなく大阪市立盲学校でエスペラント講習会が催され、熊谷鉄太郎、岩橋武夫らの盲人エスペランティストが生まれた。

1922年、大阪で開かれた全国盲人文化大会に鳥居篤治郎は、「日本盲人をして、世界の文化を共有せしめるため、国際語エスペラントの普及をはかる件」を提案した。そのころ、岩橋武夫は大阪市に点字文明協会を設立して点

字日エス辞典を出版した。また、岡山県立盲学校および大阪市立盲学校でエスペラントを正科として採り入れた。京都のカニヤ書店（寺町二条、エス語専門書店）から、講習読本が点字出版されたのもこの年である。（八木英夫編、鳥居著。1923年点字エス和辞典全2巻約600頁、同カニヤ書店より）

翌1923年岡山で第11回日本エスペラント大会が挙行された際、初めて盲人分科会が開かれた。

日本で盲人エスペラント運動が軌道に乗ったのは、1925年に親日家の盲人エスペランチスト、W.P.メリックを頼ってイギリスに留学した岩橋武夫の帰国後のことである。岩橋は、1928（昭和3）年、日本盲人エスペラント協会（J A B E）を創立した。このときから国際点字エスペラント雑誌“エスペランタ・リギーロ”を講読するようになった日本の盲人は海外の盲人事情などをこの雑誌から吸収したのである。

そのころが日本における盲人エスペラント運動の全盛時代であったが、やがて1931年の満州事変以来国情の激変に押し流され、J A B Eの存在もいつしか有名無実になってしまった。因みに岩橋武夫は「エスペラントは岩橋を、エロシェンコや鳥居に巡り合わせた」と言っている。

(2) エスペラントによる国際交流

1954（昭和29）年、鳥居篤治郎（当時京都府立盲学校副校長）が世界盲人福祉協議会の会議に出席の途次、オランダのハーレムで開催された第24回国際盲人エスペラント大会に参加し、各国の盲人二十数人と5日間分宿して、意見を交換し、1958年にノルウェーのオスローで開催された第2回国際盲青年教育者会議に出席した片岡好亀（愛知県立名古屋盲学校副校長）が、エスペラントを活用した。

また、1967年に今井秀雄（神戸市立盲学校長）が西ドイツのハノーバーで開催された第3回国際盲青年教育者会議に出席の際、コペンハーゲンで開かれた第32回国際盲人エスペラント大会にも参加して、のちにアメリカのハドレー通信教育学校のエスペラント課程の教授になったバイロン・エギグレンと親しくなり、同教授からラテン・アメリカ諸国の盲人事業についての資料

をエスペラント訳で寄せられた。

戦後、日本のエスペラント運動が復活し、1965年に第50回世界エスペラント大会が日本で開催された。その際、盲人分科会が開かれて参加者十数人はJ A B Eの再建を決議し、鳥居篤治郎を会長に推して、日本点字図書館で事務を担当することになったが、その活動は活発とはいえない。

(この後、今井秀雄氏の活躍ぶりの目ざましさを伝えているが、惜しむらくは神戸市盲校長の退職が点字エス語雑誌などの廃刊になったことを記述している。)

エスペラントは言うまでもなくポーランドの眼科医師であったザメンホフによって、新しい世界共通語をめざし創られた語格極めて簡単な言語であり、国際補助語として、日本でも大正初期盛んに行われた。日本人として最初のエスペラント修得者と言われるのは、1891(明治24)年当時ドイツ留学中であつた丘浅次郎が、フライブルグで学んだと言われている。その11年後、1902年長谷川二葉亭がウラジオストックのエスペラント会長ポストニコフから学んだといわれ、さらにその4年後の1906(明治39)年には日本の東京で、黒板勝美、堺利彦、大杉栄、丘浅次郎らによって日本エスペラント協会が結成された。(エロシェンコ全集第3巻)

この創始者たちの顔触れが自然科学者や国史学者、社会主義者の広いジャンルの人々であることが面白い。トルストイやザメンホフ、そしてバハイなどの持つ内在思想としての人類一家主義(ホマラエスモ)の共通する類似が偲ばれることではある。

3. バハイ教について

大正3(1914)年日本に宣教のため来日したアグネス・アレキサンダー女史からバハイの教えを聞いたのは2年後の大正5(1916)年であつた。エロシェンコの紹介により来日したアレキサンダー女史とは実に鳥居夫妻は変らぬ交情を生涯むすび、鳥居の人間形成に絶大なる影響を与えた。その昵懇親密の度は、はたの目も羨む生来の兄妹はらからの如くで、「トリイさん、ト

リイさん」「アレクさん」と呼び合い、鳥居先生の住居近くに絶えず住んで、いつも私宅や京盲（京都府立盲学校）に出入りする女史を見かけぬ日とて無いほえましい様子を筆者もしばしば見聞したものである。

鳥居昭君（先生の長男、昭和10年18歳）の死を悼む追憶集「永遠への黎明」の中で女史がものした「不死の薔薇園」の中で、彼女は「日本国中で、鳥居さん御一家程、私に親しく近い友人はありません。私達の友情は、思えばもう19年も前からのことなのです。其頃、凶らずも鳥居さんは私という器を通して、霊的新時代の福音に接したのです。私はその器になり得たことは、又私の特権といわねばなりません。私達の間友情の絆、それは人種を超え、宗派を知らぬ霊的なものだけに、それは永遠に続くものなのです。」と彼女の言葉で、「鳥居さん」との友情を何にたとえようもない程かけがえの無い、人種を超えたものと強く言っている。

また、「鳥居さんの家庭へ、家族の一員として、かつて迎えられたということ、これは、私にとって神が与え給うた恵であった。」とまで言っており、まさに家族の一員のごとく考え、事実それほどの親近さを傍の人々も思った程であった。

彼女が日本へこのバハイ教布教のためにやって来た頃は、いつも真白な着物に紫の帯を締めていたというので、若い頃の彼女の楚々たるお嬢さん振りは想像に難くない。彼女は有名な大学の学長さんのお嬢さんで、ローマに居たときバハイの信仰を得、爾来熱心な信者としてその一生をバハイに捧げたのであった。それほど彼女を魅了したこのバハイ教、鳥居の人生に深くくいこみその人生観を、殊にエロシェンコによるエスペラントとともに、井中の蛙をして世界の広く大きい海へ乗出さしめ、世界に不断の目を向けしむるに到ったバハイとは、とそのアウトラインを語る要に迫られる。以下はエロシェンコ全集を編纂した高杉一郎教授のことはを借りて記述しよう。少しく傾聴されたい。

○バハイ教とは

バハイの歴史は1844年5月23日に遡る。この日、ペルシャで、マホメッドの子孫にあたるミザル・アリ・モハメッドという青年が、「人間世界は新し

い時代にはいった。まもなく新時代における大教育者が出現するから、その教えを受入れることが出来るように心の準備をしなければならない」という神託をもたらした。このモハメッドは、人間世界のまえに新時代の門を開いたので、「バブ」（門を意味するペルシャ語）とよばれる。

その頃のペルシャはイスラム教の完全な支配の下にあり、為政者や僧侶達は因襲と儀式のとりことなって、無知な大衆の犠牲のうえに、安逸な夢を貪ぼっていた。心ある人々はそのような社会状態を嘆き、人間を暗黒と混乱から救い出すような救世主の出現を待望していたのであった。そんなときに、「バブ」の神託がもたらされたので、「バブ」の教えに呼応する者が全土にみなぎり、それに反し為政者や僧侶にとっては大へんな脅威であり、挑戦であったわけである。そこで彼らは「バブ」やその信者に迫害を加え、残酷な迫害を激化させるに到る。

神託を述べてから6年後の1850年7月9日「バブ」は官憲にとらえられ、銃殺刑に処せられたのである。時に「バブ」は31歳。その死骸がイランからイスラエルに移され、ハイファのカーメル山の傾斜地へ埋められた。この「バブ」の高弟の中に、ミルザ・ホセイン・アリという人がいて、父祖代々大臣職を務めた名門の出身者。徳望があり品性高潔。「バブ」の殉教後、信徒の中心となっていたが、弾圧のたけなわな1852年無実の罪に問われ、家族もろともテヘランの牢獄に囚われた。翌1853年牢獄に在って一夜ある神秘的な経験をもち、「神が約束した大教育者はおまえである」との神のお告げをきく。この神の神託をえて彼は新時代の大教育者バハ・ウラー（神の栄光、ペルシャ語の意味）となり、40年にわたる追放と幽囚の生涯を主として教育と著述にささげたのである。当局はしかし、益々さかんになっていく信徒たちの活動を抑えようとして、バハ・ウラーをテヘランからバクダッドへ流し、バクダッドでも持て余して、彼をさらにコンスタンチノーブルからアドリヤノーブルへと流し、ついにトルコ政府は最も重い罪人を収容するパレスチナのアクカの牢獄へ送った。

いかなる弾圧にもたじろがぬバハ・ウラーは、「おそるる勿れ、扉はわれわれの為に開かれるであろう」と屈服することなく繰返し信者たちをはげま

しつづけたという。1875年頃から少しずつ官憲の弾圧もゆるやかとなり、バハ・ウラーは牢獄から出されて幽閉の身となった。1892年75歳の生涯を終わるまで、神の教えを熱心にひろめたのであったが、その長男アッバス・エフエンディが聖約の中心、神の教えの解釈者として信徒の指導者として指名された。このエフエンディが、普通アブドゥル・バハと呼ばれ、後にバハイ教の世界弘宣に力を効したバハイ教師バハといった存在となるのである。父の教えを最もよく理解し、実践し、それを広く世界に及ぼそうとしてヨーロッパ各国、アメリカ合衆国へと次々に訪れ宣教弘布につとめたのである。

「バハ・ウラーのしもべ——栄光」 アブドゥル・バハは1921年77歳で永眠するのであるが、このときバハイ教は実にその信者を五大陸、147カ国に拡げて居り、大へんないきおいとなって世界に向け大きく手をひろげ出していたのである。このバハイ教は、なんと寺も教会もなく、僧侶も牧師も居らないし、お説教もしないのが特徴である。従ってあらゆる宗教的な背景を持った人達——ユダヤ教徒、キリスト教徒、ヒンズー教徒、仏教徒、それに無神論者さえ集まって、あらゆる宗教の経典を朗読し、祈ったり、瞑想したりするのである。いわばバハイ教こそは、近代の合理主義的な精神を大に取り入れた宗教といえよう。バハ・ウラーみずからが筆をとって記録した12の原則的な教理を以下しるすことにしよう。

○バハイの原則的教理（12個条）

1. 人はすべて神の子である。もともと人間の本質にはなんの相異もない。新時代には、すべての人々が一つに統合されなければならない。
2. 古い習慣を盲目的に守るのでは、人間社会には進歩がない。みずから力で真理を探求することは、新時代に生きる人の義務である。
3. 時と所によって、ちがった名称の宗教が人間の世界にもたらされたけれど、その源はおなじ一つの神である。
4. 宗教は人と人とを結びつけるものでなければならない。もし宗教が仲たがいや、争いのもとになるならば、そのような宗教はむしろない方がよい。
5. 宗教は真理の教えであって、科学と理性の一致するものでなければは

らない。

6. 男女両性は、おなじ機会と権利をあたえなければならない。
7. 人種、宗教、習慣、国民性、性別などに関するあらゆる偏見は、人間相互の理解と協力を妨げるものであるから、これを捨てなければならない。
8. 世界平和の確立は、神が人間に望みたもう最高のものである。
9. 教育はあらゆる人間活動の基礎であるから、全世界を通じて教育の普及をはからなければならない。
10. (略)
11. 言語は人と人をつなぐ道である。世界共通の国際補助語を採用して、国際協力のベルトとしなければならない。
12. (略)

(10は経済問題、12は世界平和の問題を説いているが、長く煩さとなるので省略させていただいた)

以上の精神が、トルストイの思想やザメンホフのエスペラントとその内在思想である人類一家主義（ホマラエスモ）に非常に似通っている。またゴリーキーの試みた理性的な造神運動にも似かよっている。この様な新しい性格をもった宗教、バハイ教がアグネス・アレキサンダー女史の手で初めて日本に伝えられたのである。

新しい時代をいち早く呼吸し、新しい空気を存分に吸収し、なんでもとり入れようと張切っていた鳥居青年にとって、このバハイの12の原則教理は深い衝撃として彼の胸を搏ち、深く彼の人格形成に影響を与え、後年のあの包容力ある、世界に眼をひろげ人を愛し真理を探究するアベタイトを女史より受けとったのであると思われる。(11)に謳われているようにエスペラントがその使用語とあり、これがエロシェンコとアグネスのむすびつきもさこそと肯かせられるところであろう。

かくてアグネスが東京九段坂上の横丁に住んでいたアパートには、エロシェンコやエスペランティストたちが次々に訪れるようになり、バハイの教えに導かれたのである。たとえば福田邦太郎、望月百合子、秋田雨雀、エスペラン

チストではなかったが神近市子などが訪れるようになる。神近は言うまでもなく男女同権を説く青踏社で有名な新聞記者。やがてこの人達を中心としてインテリ夫妻が経営すると評判の相馬愛蔵、黒光の新宿中村屋が舞台になって広い当時の日本の先端をゆくインテリ達とのつながりができていく。鳥居はこのエスペラント、バハイを通じて異国のすぐれたこの友との出会いに、世界的な視野の拡がりに胸をふくらませてゆくのである。

鳥居がエスペラントとエロシェンコを介しアレキサンダー女史によりバハイ教に傾倒するようになり、強い影響を受けたことは縷々述べたが、どうしてもバハイがそんなに彼をとらえその一生を支配する教えとなったかを「すてびやく」に掲載の彼のことばをかりてのべると——「私は18歳のとき、1度はキリスト教の洗礼を受けてクリスチャンになりました。しかし間もなく、どうしても私の気持ちにぴったりせず22・3歳頃からは煩悶し始めました。(中略)バハイの教えは、一さいの偏見を捨てさせるにあり、人種的、宗教的偏見を捨てて世界の人類は一つだと考えさせる。(中略)一時は仏教に関心を持ったが、一番分かりやすいのはバハイ、殊にバハイでは、他の宗教に対して排他的でなく、お互い尊敬し合う平和な愛の気持ちの持ち合わせ。(略)私のように目が見えないと、物の差別が分かりにくい。それは一切無差別というバハイに通じる。それでバハイが私の一生を通じて支配する教えとなった所以かも知れない」と語って居る。コスモポリタンの鳥居さんらしいと思われることである。

4. 中村屋のサロンと相馬愛蔵・黒光夫妻

エロシェンコが中村屋に寄寓するようになって鳥居とのつながりの周辺に、秋田雨雀との関係もあって、長谷川如是閑や井伏鱒二、江口渙、竹久夢二、浅井恵倫、堺利彦なども交流した。中村屋に近く大久保の文士村の住人たち水野葉舟、吉江孤雁、国木田独歩、戸川秋骨、島崎藤村などそうそうたる顔触れの人たちも常に中村屋のサロンに顔を見せたことと思われ、そんな人々の醸成するムードをからだ一杯に感得したであろう文学青年鳥居はこころの

糧を存分に飽かず食のごとく満喫したことであろうこと想像に難くない。

中村屋（新宿パン屋喫茶店）とそのあるじ夫妻たる相馬愛蔵、黒光女史については、臼井吉見の著「安曇野」（ちくま文庫全5冊）の中で信州に結ばれた木下尚江とともに活躍した詳細が描かれている。この当時としては珍しいインテリ（愛蔵は東京専門学校のちの早稲田大学、黒光は明治女学校出身）パン屋はなかなか大した人物で、殊に奥さんの黒光女史の女丈夫ぶりは名物で、インドの亡命志士で彼女を頼って来たボースを（のちにエロシェンコに借すアトリエに）こころよくかくまうといった肝の太い親分肌の姐御として、文士たちや画家、演劇人、社会主義の活動家たちに人気のあったようで、長女の俊子さんはボースの奥さんになったり、三男の良君はロシア語でトルストイやゴーリキーを読んでいる有様。出入りする人たちのことからして官憲にいらまれて、エロシェンコの国外追放の折など「彼は詩人でエスペランティストに過ぎない。社会主義者アナーキーなどでない」と警察でタンカを切ったりする勇み肌が、若い人たちに慕われ、早大、東大、一高生など学生たちの人気抜群。それがパン屋喫茶の中村屋を根城に梁山伯風サロンとして声価



新宿中村屋にて、エロシェンコと相馬黒光

を高めていたのであろう。静坐法で今も語り伝えられる岡田虎二郎（岡田式静坐法——ゆくりなくも筆者の友人京都吉田の小林信子さんの静坐社が継承、一世を風靡した岡田氏の事は学生時代からよく聞かされて承知。成瀬無極など熱心な静坐を通じて岡田先生の信者であった）や田中正造、塚枯川、大杉栄、さては松井須磨子、島村抱月、望月百合子、画家では中村彝、津田青楓、安井曾太郎など、そして上山草人、土岐哀果、有島武郎、若山牧水、上司小剣など映画人・文士たち、まことに多彩な当時の各界の第一線級のシンクタンクがここ中村屋に絶えず出入りしたり屯していることが、この「安曇野」の紙面に窺はれる。

前述の祖国の独立に命を賭けたインドの革命の志士ラス・ビハリ・ボースは、頭山満や内田良平を通してこの相馬夫妻ならと見込まれて、ここを隠れ家として4カ月半かくまわれるのであった。亡命といえばかの中国革命軍の首領孫文も日本に来てこの相馬夫妻との交流を深めたようである。元来愛蔵氏は一時期大隈首相を慕ってその許へ代議士として馳せ参じようとし（母校ワセダへの愛校心が強く）て、内村鑑三先生に意見を求めて猛反対されたといったイキサツもあり、黒光女史は前述した様に「わかった」と胸をたたいて式の肚の大きい女傑。ボースなども「オカアサン、オカアサン」と甘える様子がおかしいぐらいと「安曇野」の中に叙述されている。鳥居青年などもエロシェンコ（エロさん、エロさんとみんなが呼んでいた様子）とともに黒光さんに目をかけられ、その包容力ある人柄に、惹かれたことであつたらう。田舎からポッと出の盲目の鳥居青年には余りにも多彩な刺激的な、然し多分にロマンティックでさえもある、こんな雰囲気や新しい民主的な気風や、世界の風や空気に触れて黎明、あけぼのの近代日本の夢や理想をはらんだ、ハイカラで斬新な日本の夜明けをからだでビシビシといたい程感じとる明け暮れをここ新宿中村屋から呼吸し、身につけるよろこびに浸ったであらうと思う。

幸せ多き青春・東京時代であつたわけ。やがて、後年世界に羽搏く鳥居、偉大なる平凡人（岩橋英行氏のことば）と言われ、京都名誉市民となるあくまで「市井の人」として終始した氏の素地は、この大東京の街の中、小さな

パン屋につどう「平凡にして非凡なる」人たちの中に醸し出される空気を十分に吸って、血となし肉としたこの青春時代のみのものである。

近代黎明の前夜、日本のいろんな分野でフロント頭脳となった人たちの集団、サロンの中外で大なり小なり深く浸透したその影響は、ゆるがせにできぬ鳥居篤治郎の人間形成の大きな要素であった事を重ねて強く銘記したい。

因みに、神近市子に寄せるほのかなエロさんの恋心、ボースとエロさんのきびしいディスカッションなどなど、「安曇野」は一読に値する読みものとしてさすが臼井吉見氏（つい先頃逝去）、信州人独特の鋭く透徹犀利の文と眼に敬意を表し一読を推挽したい。

5. 出会い——「私の財産は友だち」 （鳥居のことば）

鳥居篤治郎における出会いの大きさについては、その出自——京は丹後の名門名望家の出身（鳥居家10代目の当主たるべき篤治郎だった）。そして幼少年期における厳しくかつはやさしい父君武右衛門さん。京盲少年期の心の友たる従兄蒲田丈夫との交遊の間に文学的素養や語学力基礎培養。そして青春東京時代の二人の異国の友との出会いは、井中の蛙をして世界的視野を得、エスペラントとバハイの信仰が、その人間形成に絶大なる影響を与えた。その間介在する秋田雨雀氏による中村屋サロン、相馬夫妻の広い交友たる当時のフロント頭脳うんじょう的集団の醗酵する世界の発散する新しい時代を先取りする気流の中に、自からなる吸収接触、各界の第一線の人物より直接間接的に得たる出会いの値遇とでも言うべきか。「心の出会い」は、実に大きかったと思われる。中村屋サロンの自由の空気、人間性、信頼、連帯の美しさ、強さなどを通じ、“自分らしく精一杯生きていこう”ということを学びとったすばらしい邂逅、出会いであったと思われる。よき出会いと言えば、すぐ想起されるのは、真淵と宣長、サルトルとボーヴォワール、岡倉天心とフェノロサ、一番著名なのは法然と親鸞のそれであろう。

心と心の触れ合いによる自己内面の変革。法然はそもそも30年余りも迷ったのちに中国の祖師善導の「一心に専ら弥陀の名号を念ぜよ」との一言に出会って目ざめ、南無阿弥陀仏を唱える念仏者となったのであり、親鸞は聖徳太子の告示を受けて法然に出会い念仏門に入るのであるが、有名な歎異抄の文言に「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけまいらすべしと、よき人の仰せをかぶりて信ずるほかに、別の仔細なきなり」とあるように、法然の「ただ念仏して弥陀にたすけまいらすべし」との言葉こそ、29歳の親鸞が出会った衝撃の一言だったのであった。この言葉によって長い迷いから親鸞は目覚め、他力本願の念仏者となったのである。

「たとえ法然上人にすかさねまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさうらふ」（歎異抄）というときに親鸞は法然の中に、超越的人格である仏を見ているのである。現世に於ける人と人との出会いのなかには、いつも、超越的人格との出会いがはたらいているのではなかろうか。親鸞はそう考えていたのである。わたしとあなたとの出会いの底に、いつも「わたしと超越的存在としての仏との出会い」がはたらいていたのである。

こう思うと、エロシェンコとアレキサンダー女史との出会い、この二人を通して秋田雨雀やエスペラント、バハイとの出会いなど何がなし出会いの持っているものに考えさせられることが多い。

鳥居は、岩橋武夫や小林卯三郎、秋元梅吉、寿岳文章、大野加久二などなど、「私の財産は友だちである」と彼の口をもって語っている様に「よきとも」に恵まれ、心と心の出会い、そこから得る多くのものに恵まれた幸せな人ではあった。それに何よりも彼にはすばらしい生涯の伴侶、羨しくも幼馴染で恋妻として才色兼備の「先生の眼」「先生の杖」となった永遠の手引、伊都夫人のあること。これこそ鳥居篤治郎の最大の出会いであつたらう。ベターハーフならぬベストハーフの伊都さんの事は、また後に触れるとしてここでは措くこととする。

とまれ人は「出会い」によって真の生に達する。他者に会うことによって自分を照らし出し、自分自身と出会うということなのだろう。

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みにになりたい場合には
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。

盲先覚者伝記シリーズ No.5

鳥居篤治郎

— 世界に眼を・永遠の青年 —

1988年1月15日発行

定 価 800円 (送料 200円)

著 者 赤 阪 一

発行所 日本盲人福祉研究会

〒166 東京都杉並区成田東
5丁目36番15号

電話 03 (220) 1421

振替口座 東京 6-16103

印刷・製本 東京
墨田 合同印刷株式会社

〒130 東京都墨田区業平
2-9-13

電話 03 (624) 6111

日本盲人福祉研究会

定価800円